

日本における韓国系キリスト教会の展開過程——荒川区荒川・日暮里地区を事例に

主査教員 高橋典史

社会学研究科社会学専攻・博士前期課程

荻翔一

第1章では、本研究の目的として、社会学的な立場から、在日コリアンのかかわる韓国系キリスト教会（以下、韓国系教会）を対象に、その展開過程を歴史的に明らかにすることを述べた。その際、マーク・マリNZのエスニック・チャーチ（以下、EC）の展開モデル（Mullins, 1987）から、①ECは歴史を経るにつれ、ホスト社会に適合的な移民二世や国際結婚夫婦が一定の割合を占めるようになり、組織を存続させるにはホスト社会への適応を図るような形態へ変容しなければならないこと、②例外として新移民の流入によって組織が存続することを踏まえ、本研究ではそれを批判的に検証した。展開過程を分析する際、宗教組織外の要因として、国家・地域社会の社会変動が与える信者構成・教会制度への影響、宗教組織内の要因として、在日コリアンの志向性が与える教会運営方針への影響に注目した。調査対象は、荒川区荒川・日暮里地区における東京福音教会（1924年設立）とした。また、日本に滞在する朝鮮半島出身者とその子孫を、来日時期によって「戦前在日コリアン（1910～1945年）」、「戦後在日コリアン（1945～1970年代）」、「韓国系ニューカマー（1980年代～）」に分け、前二つを総称して「在日コリアン」とし、これと「韓国系ニューカマー」を別個のエスニック集団として措定した。

第2章では、外村大の研究（外村、2004）を参考に、1920年代以降に形成された在日コリアン社会の構造とその変容から、荒川・日暮里地区の位置づけを明らかにした。そこから、本地区の特徴として、①インナーエリアとしての地域的特性、済州島出身者の血縁的・地縁的ネットワークによって本地区に戦前在日コリアンが集住したこと、②戦後も済州島出身者を中心とした戦後在日コリアンが継続的に流入したことによって在日コリアン集住地区として社会的結合や文化を維持していたこと、③1980年代後半以降そのような結合や文化を維持する本地区のエスニックな資源を利用して本地区に韓国系ニューカマーも流入したことをあげた。

第3章では、国家・地域社会の社会変動が東京福音教会の信者構成・教会制度に与える影響を時期ごとに明らかにした。具体的には、次の通りである。1924～1937年に、上記①の特徴によって、本教会に低賃金労働者層の戦前在日コリアン一世・二世が集まり、彼（彼女）らに向けた「祖国」とのつながりを意識させる教会制度が整えられる一方で、「日鮮融和」のもと、日本社会への適応を目指した。1937～1945年の戦時下体制では、日本国家の管理下に置かれ、信者構成は変わらなかったものの、日本化された教会制度となった。1945～1970年代は、上記②の特徴が反映し、戦後在日コリアンが本教会にも流入し、信者の多様化が生じた。だが、朝鮮語（韓国語）話者である戦前在日コリアン一世によって「祖国」

とのつながりを意識させる教会制度を敷きつつ、日本語話者である戦後在日コリアン一世（と戦前在日コリアン二世）のもと、日本社会に適合的な教会制度が整備された。1980年代～2008年は、上記③の特徴によって、韓国系ニューカマーが流入し、マルチ・エスニック化した。教会制度としては在日コリアンに親和的なものを残しつつ、韓国系ニューカマーに向けた教会制度が次々と新設された。リーマン・ショックが発生した2008年以降は、流動的な信者の大量流出によって、本教会の信者に日本への定住志向のある人々という均質性が形成され、再び日本社会に適合的な教会制度が整備されていった。

第4章では、本教会の展開過程における宗教組織内の要因として、在日コリアンの志向性の形成・継承・断絶を明らかにした。具体的には、次の通りである。1924～1937年は、当時の在日コリアンが置かれていた立場を反映し、「祖国」とのつながりを意識しつつ、日本社会への適応を目指す二面的な志向性があった。だが、1937～1945年の戦時下体制でそれは一時的に影をひそめた。1945～1970年代には、戦前在日コリアン一世のつてによって戦後在日コリアン一世が流入し、両者の間に「家族的」な紐帯が生まれ、前述した二面的な志向性が共有された。それは戦前在日コリアン一世が亡くなった後も戦後在日コリアン一世に受け継がれた。しかし、1980年代～2008年にかけては、韓国系ニューカマーの大量の流入による「韓国式」への需要増加を背景に、韓国系ニューカマーにとって親和的な「祖国」とのつながりを重視する韓国系ニューカマー牧師の志向性が台頭し、在日コリアンの二面的な志向性とは別個に併存したため、運営方針を巡る相克が起きた。2008年以降は、韓国系ニューカマーを中心とする流動的信者層の流出によって、上述した均質性が形成された。それは、韓国系ニューカマー牧師も日本社会への適応を目指すような志向性を共有させることにつながり、再び二面的な志向性が復活しつつある。

第5章では、これまで論じた内容と、マリNZのECの展開モデルとの相違点に注目し、本事例から明らかになった在日コリアンのかかわる韓国系教会の展開過程の研究についての新たな知見を提出した。第一に、その分析視角として、宗教組織外部の要因にも注目する必要があること、特に日本と朝鮮半島（韓国）のマクロな社会変動に加え、地域社会の社会変動も踏まえる必要があることと、宗教組織内部の要因では、移民二世や国際結婚夫婦の増加といった要因だけではなく、運営の担い手である在日コリアンの志向性も踏まえる必要があることを示した。第二に、在日コリアンのかかわる韓国系教会の展開過程においては、新移民の流入は単に組織の存続を意味するのではなく、新旧移民の様々な差異によって、必ずしも調和しない二つの志向性が併存ないし対立する状況が生まれ、組織が瓦解する危機性があることを示した。